

中華人民共和国による新疆統合の第一歩

——中国「軍旅文学」からみる強制移住と強制結婚——

ダシ・ドノロブ

はじめに

1949年9月、新疆は中国人民解放軍の管轄下に置かれた。いわゆる「新疆の平和的解放」である。しかし、当時の新疆には漢民族の人口が非常に少なく、新疆の中国への統合を強化するために、漢民族の移住が必要不可欠だと、中国政府は判断した。新疆に進駐した20万人の軍人に対し、中国中央政府から屯田定住の命令を下した。つまり、強制移住ということである。将兵たちはこの命令に不満だった。やっと戦争が終結し、平和が訪れたので、彼らは故郷に帰って結婚して家族と平穏な暮らしを送りたかったのである。なのに、彼らは新疆という辺地に政府からの一方的な命令により強制移住された。このような彼らの不満を解消するため、中国中央政府は、中国内地から5万人もの女性を新疆に移住させ、将兵たちとの結婚を強要した。つまり、5万件にもものぼる強制結婚という大きな悲劇である。

中華人民共和国成立直後に行われた新疆統合へのアプローチの第一歩が、強制移住と強制結婚という過激な形で実施されたのである。その過程で、たくさんの悲劇が生まれ、自殺者や精神疾患を患う人が頻出し、殺人事件も多発した。強制結婚を強いられた女性たちの対応はさまざまで、無抵抗で押し付けられた結婚を我慢したり、激しく抵抗して殺されたり、または精神的に病んだりして、いろいろな事例があった。

彼女たちの悲劇は長いあいだメディア等に取り上げられることなく、40年余りのあいだ人々に知られることはなかった。軍旅作家（軍人作家）による「軍旅文学」の作品に、彼女たちのことを取り上げられ始めたのは20世紀末のことだった。

本稿は中国軍旅文学に反映された中華人民共和国建国直後に行われた新疆

での強制移住と強制結婚について検討し、中華ナショナリズムにおける中国政府および中国国民の観念の葛藤を分析するつもりである。つまり、ナショナリズムという民族集団利益・民族国家利益の追求と集団成員としての中国人個人の利益の相克とそれに対する取捨について検討したい。

ネイションの利益確保のため、個人はどの程度の犠牲を甘受すべきか、というナショナリズムの正当性の限界を考察するつもりである。

中華人民共和国建国直後に行われた強制移住と強制結婚に関して、中国今日の世論は二つに分かれている。とりわけ、強制結婚に関しては、「中国版慰安婦」だというような強烈な批判がネット上で殺到する一方、新疆の統合に多大な貢献をしてくれた「辺地の母」だと称賛する声もある。

本稿は強制結婚を題材にした軍旅文学の代表作をいくつか参考しながら、強制結婚の代表的な事例を日本語に訳し、作者の意図と世論の実態をも分析するつもりである。

1. ユーラシアを横断する3本の古道

考古学の研究調査結果によると、ユーラシア大陸の東西を結ぶ最古のルートは、本来北方の森林地帯にあったといわれている。今日のシベリアに点在する旧石器の遺跡がそれを如実に語っているだと考古学者が主張している^①。しかし後期旧石器時代を迎えると、ユーラシアを貫通する交通路はやや南の方に移り、いわゆるステップ地帯、つまり今日の中央アジアの北部を東西に横断する草原の道が開かれたのである。その時期の代表格といわれているスキタイ遊牧文化が有名で、そのルートは黒海の北岸あたりからカスピ海の北側迂回し、ウラル山脈の南あたりを越え、バルハシ湖の北方からアルタイ山脈の南麓に達し、今日のジュンガル盆地まで続いたのである。このルートにそって、青銅器遺跡も点在している。いわゆるスキタイ文化である^②。

この草原の道は、ヘロドトスの歴史書にも記述があるほど有名なので、紀元前5世紀をさかのぼることは確実であろう。ジュンガルの北にあるザイサン湖周辺に当時、大きな市場が開かれ、毛皮や金の取引が行われていたといわれている。

ユーラシアを横断して東から西へ移動していた匈奴や突厥も、この草原の道を使っていたという。この度重なる民族大移動は、紀元4世紀後半からヨーロッパの天地を揺るがし、大挙して西へと殺到したあのフン族もこの草原の道を通してヨーロッパにやってきた匈奴だといわれている^③。

そして、森林の道と草原の道からさらに南下してくると、あの有名なシルクロード（絹の道）になるのである。タリム盆地のオアシス地帯とパミール高原をへだてたクズル砂漠地方のアム川・シル川流域のあいだに古くから交通路があったことは、黄河中下流域の彩陶文化がオリエント起源と考えられることから裏付けられる。タリム盆地のオアシスには古くから都市国家が林立し、少なくとも中国の秦代から「36国」とか「50余国」とかと称される小国が点在していた。これらの都市国家に対するコントロールを巡って、古くから北の草原帝国（匈奴・突厥・モンゴル）と南の農耕帝国（秦・漢・唐）のあいだで、激しい攻防が繰り返されてきた。近代になっても、産業革命の影響により遊牧民族の軍事力が衰退したとはいえ、南下してきたロシア帝国が中国の新しいライバルになったのである。

遊牧帝国の匈奴は、秦末漢初のころ強大化し、漢の高祖劉邦を屈服させ西域（今日の新疆辺り）を勢力下におさめた。35年後、漢の武帝が強力な匈奴帝国を牽制するため、中央アジアまでに張騫を使者として派遣し、月氏国と同盟を結ぼうとした。その詳細は司馬遷の著した『史記』に記されている。

漢の国力が最盛期になった武帝の時期に、やがて李広利（武帝に派遣された将軍）率いる漢の軍隊が西域諸国を制圧し、匈奴の勢力をオアシス諸都市から追い出したのである。新疆（西域）が初めて中国の勢力圏となったのである。紀元前102年のことである。

このときから、西域を確実にコントロールするため、漢の武帝は屯田兵を派遣し、西域の経営をめざしたのであるが、漢と匈奴のあいだで西域の支配権が反復常なく、漢の西域支配は一進一退が続いたのである。この歴史パターンはずっと中華人民共和国成立まで、2000年も続いた。

2. 新疆での駐屯開墾

こうした歴史的背景のなかで、1949年誕生した中華人民共和国は、新疆の統合という歴史的難題に直面したのである。この難題を最終解決するため、毛沢東率いる中国共産党政権は、漢の武帝をはるかに超えた断固として鉄腕措置をもって対処したのである。それは20万人を超える屯田兵の強制移住と5万件を超える強制結婚の断行であった。

1949年9月、新疆が無血「解放」され、中国人民解放军がこの地域に派遣された。総計20万余の新疆駐屯軍が突然そのまま現地での屯田開墾を命じられた^④。中国中央政府からの命令には従わざるを得なかったが、将兵たちの多くは不満だった。彼らは自分たちの故郷へ帰りたいかった。戦争が終わり、やっと平和になったので、故郷に帰り、結婚して平穏な生活を送りたかったのである。しかし、突如の駐屯開墾命令を受けた20万人の軍人たちはショックだった。当時中国共産党中央新疆分局書記、新疆軍区司令官の王震は、軍人たちを安定させるために、独身者將兵に内地から妻を「調達」してあげると約束した。

公丕才著『辺地の母』に、「わたしが悪いんだ。長年わたしについて戦ってきた部下たちが、いまだに独身であり、妻がない」と王震があやまり、北京の共産党指導者たちに、「女を調達してほしい」と直訴したという^⑤。『辺地の母』によると、「王震が中央会議に出席するため北京に行ったとき、彭徳懷といっしょに周恩来宅を訪ね、「総理、今回は彭さんと一緒にあなたから女の配給を頼みに来たんだ。將兵たちへの妻の配給ということ。」と懇願した。すると周恩来は、「あなたたちの報告書を、わたしも毛沢東主席もちゃんと読んだ。妻の問題は確かに解決しないといけない。20万の將兵が長年の戦いを経て、やっと新中国という政権を樹立したのに、遠く辺境の地に派遣され、屯田することになった。結婚する相手もなく、生活が安定しない。しかし、中央政府はこんなに大人数の女を調達できるわけがない」^⑥と答えたという。その後、中央政府から、新疆軍区が全国各地から未婚女性を女性兵として大量募集することを許可したのである。つまり、將校たちの結婚問題を解決しようとしたのである。

王震が新疆に帰ってから、さっそく中央政府の決定を屯田軍に伝えた。「同士諸君にいい知らせをもってきた。毛主席と党中央が許可してくれた、内地から大量の女性兵を募集することを。諸君全員妻がもらえられると保証するぞ。安心してここで生活してください。そして子供をたくさん作ってください。」と、王震は言った。

そして、計画は直ちに実施された。1951年から1952年まで、8,000人ぐらの女性兵が新疆に入ってきた。実は最初、1949年に陝西省、甘肅省からすでに1,000人余の女性兵が新疆に入ってきた。1950年に、四川省から、1951年に湖南省から計3,000人の女性兵が新疆にやってきたのである。1954年までに、すでに4万人余りの女性兵が全国各地から募集され、新疆に運ばれてきたのである^⑦。

3. 中国軍旅文学に描かれた強制移住と強制結婚

『辺地女性兵：新疆5万女性兵の婚姻記録』によると、

5万人の女性と166万平方メートルの国土の物語、わたしの手が熱くなり震えた。新疆は彼女たちの忠誠によって守られた土地だ。彼女たちは6,000キロメートルの風雪国境線に聳え立つ標石だ。彼女たちは新疆の母だ。この『辺地女性兵』は、著者のわたしが彼女たちのために建てた開拓記念碑だ。

西域が漢代に我が国の版図に帰属したとき、西はバルハシ湖東南地域まで、南はカラコルム山脈南北両麓までだったが、唐代およびカラハン朝、西遼および元朝のときは、その西部領域は漢代より遥かに広がった。清朝の最盛期にもバルハシ湖東南地域まで領有していた。つまり今日の新疆は、清朝最盛期の領有面積の半分しかない。強欲のロシア帝国が、弱体化した清政府を脅迫して一連の不平等条約を押し付け、我が国から広大な領土を割譲占領したからである^⑧。

これこそ新疆の背景である。広大で美しいながら、悲しくて重苦しい。

この歴史的背景が、われわれにある暗示を与えているかもしれない。つまり、この土地では常に人々の予想を超える出来事が起こるだろうと。

新疆での土地開発と国境防衛は、漢代以来の各王朝が抱える国家安泰に対

する責任と夢であった。それゆえ、こんなにもたくさんの駐屯開墾の跡や古城の遺跡が今日まで残されているのである。歴史上毎回開墾が行われる度に、多くの人々が様々な形で新疆に移住してきた。

……

新疆の駐屯開墾は遙か2000余年前の漢代から始まったのである。ある意味では、漢による西域統一は駐屯開墾の過程で行われたともいえるだろう。2000年以來の歴史が幾度も証明したこと、つまり、「駐屯開墾が成功すれば辺境が安泰にあり、駐屯開墾が失敗すれば辺境が混乱に陥る」^⑨ということである。

細君公主の随員たちが烏孫国で屯田を始めたのが、新疆駐屯開墾史の第1頁を開いたのである。それ以來、西漢から清朝まで、歴代中央政府により新疆で行われた駐屯開墾地は計102か所もあり、天山南北の広い範囲に点在している。

西漢による西域における駐屯開墾の最盛期には、将兵合計人数が2万5千人余りに達した。それによって西域の中央政府への統一を強化し、中国西部における経済・文化の発展を大きく促進した。『後漢書・西域伝』の記載、「立屯田於膏腴之野，列郵置於要害之路」により、様々な地名がその時代から濃厚な歴史感覚と詩に如き豊富な韻律を現代まで伝えてきたのである。たとえば、輪台、楼蘭、伊循、焉耆、龟兹、高昌、交河など。唐王朝の西域における屯田は史上最盛期であり、駐屯軍が最多10万人に達した。屯田は唐の領土の広大さを確保する同時に、シルクロードの空然たる繁栄をもたらした。清代の屯田規模史上最大である。ジュンガルの乱を平定してから、清は屯田を辺境安定のための国策として確定した。軍隊による駐屯開墾、つまり「軍屯」だけではなく、関内から大量の農民を西域に移住開墾させる「民屯」もあった。さらに、新疆に大量に流刑させられた受刑者（犯人）による「犯屯」もあった。新疆南部からウイグル人農民を北部に移住開墾させる「回屯」もあった。20年足らずの期間で西域に66,000ヘクタールの耕地を開墾したのである。

……

新疆の平和解放を迎え、人民解放軍第22位兵団に改編された元国民党部

隊と人民解放軍第5軍に改編された元三区民族軍を入れると、総計20万人の大軍が天山南北に駐在している。ようやく平和の温かい光を浴び始めた新疆駐留軍は、食糧という難題に直面した。

……

解放直後の新疆にはほぼ何の産業もなく、農業もあまりなく、食糧は一人当たり200kgも足らず、新疆駐留軍の食糧需要量は年間400万kgだった。関内からの食料輸送は費用が高く、蘭州からクルム市までだけでも、輸送費が食糧価格の7倍になり、そこから更にイリ市やアルタイ、カシュガルまで輸送するととんでもない輸送費がかかってしまうのである。ソ連から輸入するにしても、1トン当たり300ルーブルで、年間費用が数億元にのぼる。新疆軍区設立直後、補給部長甘祖昌が毎月北京から銀貨を輸送してもらい、食糧の購入に使っていた。解放直後の中国にとって、大きな負担になった。そして、周恩来総理が甘祖昌に対して、「人民解放軍が新疆を守るためには、ほかに頼らず、自分で食糧を生産するしかない。」と言った。

1950年2月、毛沢東は新疆駐留軍に対して、「戦闘するための武器をしまつて、生産するための武器を取ろう」という命令を発した。この命令は戦争終了の宣言であり、武器をしまつて農具をとるという宣言でもあった。この命令は20万もの新疆駐屯軍の運命を決めたのである。

当時の中国軍人の多くは軍服を着た農民であり、もともと土地や食糧のために革命軍に参加したのである。彼らにとっては、農業に携わるのはさほど難しいことではない。

新疆という気候変化が激しい大地、恐ろしい嵐、耐えがたい酷暑と厳寒、土地の砂漠化や土壌の塩化、

4. 彼女は夫との写真撮影を拒否し続けてきた

徐理芳も朱仙菊と同じ、開拓団の大地に撒かれた「蚕豆^{そらめ}」だった。

違うところといえば、5粒もの「子豆」(子ども)を繁殖し、ちゃんと育てた徐理芳が、ひとりの女性として自分の運命に対して、生涯の沈黙をもって抵抗してきたところだろう。

もちろん、彼女のこうした沈黙の抵抗は何の結果をももたらさなかったが。徐理芳が59才になったころ、いきなり自分の人生を語り出しくなっていて、回顧録を書き始めた。『忘れ難き一生』という題で、彼女は自分の結婚人生を述べた。

「わたしも朱仙菊と同じ、勤労模範者生産会議のあと、上司に呼ばれたんです。」徐理芳はいう。上司は彼女を机の対面に座らせ、まじめそうな顔でいくつかの時事問題や政治問題を聞いた。

徐理芳の答えが全部正解だったので、上司はコップを持ち上げ、水をひとぐち飲んでから、「徐理芳同志、あなたはもう20才を過ぎていて、〇〇同志とちょっと付き合ってみてから、そろそろ結婚したほうがいいと思う。」

「いいえ、できません。」驚いた徐理芳は即答した。「わたしは家へ帰りたいです。母と弟が待っていますので。」

上司はすぐ、「それは簡単に解決できる。お母さんと弟さんを新疆に呼べばいい。家族が一緒になって、お互いに面倒を見ることもできるし。」と言った。

「弟はまだ学校に通っていますよ。」徐理芳は断るのに使えそうなすべての理由を必死に探し出そうとしていた。

「それは、ここの学校に転校すればいいのさ。」と、上司はそう言ってから徐理芳を誉め始めた。「あなたはとても親孝行の娘だと聞いたが、本当だったね。やっぱりあなたが最適任者だ。わたしの見る目は間違っていない。」

徐理芳は他の拒否理由をすぐには見つけなくて、反論できなかった。

「あなたも知っているとおり、彼は先輩革命家で、すばらしい幹部であり、とてもよい同志だ。われわれ組織の立場から考えても、彼のことに對しては責任をもっているし、あなたに對しても責任がある。彼のような先輩同志の結婚問題は慎重に扱わなければならないし、もちろん強制もできない。これは政治原則の問題だ。」

さっきなぜ時事問題や政治問題を聞いたのが、やっとわかってきた。政治問題の中に「部下は上司に服従する、個人は組織に服従する」という1問があったからだ。徐理芳はその質問の意図が今わかった。

何の反論もできなくて黙っている徐理芳を見ながら、上司は話を続けた。「われわれの先輩革命同志の結婚条件はちゃんとしているよ。結婚相手はま

ずは政治思想が問題ないこと、そして体が健康であること、第3は性格が従順であること、さらに教育レベルが高い……」

「これらの条件には、わたしは全部不合格ですよ。」徐理芳は慌てた。「これから仕事にも勉強にも努力します。彼には他の適格者を探してあげてください。お願いします。」

「いいえ、われわれ組織からの考察結果ですが、あなたが最適者だと判断したのだ。あなたと彼なら絶対問題ない。一緒に生活できる。彼と一緒にあって幸せな家庭を作り上げること、それが組織のあなたに対する信頼ということだ。」と言ってから上司はこう続けた、「いかがですか。まさかあなたは反対とかしないですよ。徐理芳同志なら、個人婚姻問題に対して正しい判断ができるはずだと、わたしは信じている。」

徐理芳が回顧録のなかでこう書いた。「上司が『組織』という言葉を持ち出した瞬間、わたしの喉が詰まってしまった。わたしは共青团員なので、反対だとは言えず、同意とも言いたくないので、恥ずかしくて顔が赤くなり、ずっと黙って下を向いていた。その後、時間がどのぐらいたったかも、上司が何を言い続けていたかもはっきりとは覚えていない。やっと面談が終わり、上司がわたしの頭を軽く叩いて、あなたはちゃんと話が分かるいい子だ。さあ、もう帰ってもいいよ。ゆっくりお休みなさい。と上司がそう言ってくれた瞬間、わたしはやっと解放された感じで、すぐ部屋から飛び出した。」

面談のあと、10日間ぐらい何も言われなかったので、徐理芳が「警報解除」かなあ、とほっとしたときに、兵团政治処から彼女に通知が届き、お二人の結婚申請は上級組織から許可が降りたので、すみやかに結婚式の準備をしてくださいという内容だった。

兵团戦友たちの祝賀の歓声を浴びながら、徐理芳は彼と夫婦となった。

結婚生活について、徐理芳が回顧録のなかでこう書いた。「毎日を任務の遂行だと思って過ごした。またひとり子供を産むと、任務遂行のもうひとつの成果だと思って生活してきた。」

しかし、1958年、彼女の夫が大躍進運動中の鉄鋼生産現場で起きた事故で下半身が不随になり、彼女の「結婚任務」に新たな内容が加えられた。またもあの上司に呼ばれて、2回目の面談が行われた。彼女は組織から指示

された新たな任務として夫の介護を始めたのだ。

それからずっと、徐理芳は病床に横たわっている夫を38年間介護してきた。

偶然の機会で、わたしは徐理芳さんと知り合った。同じ山東省出身のわたしは彼女と同郷だった。彼女が淡々と自分の物語を述べているのを聞いて、わたしのこころは泣いた。しかし同時に、彼女に対して肅然とした尊敬の念を抱くようになった。彼女は結婚を任務として遂行した山東出身の女性兵士なのだ。

徐理芳さんの家に写真アルバムがたくさんあり、写真のなか、彼女のそばに、彼女の戦友や友人や子供たちの姿があった。しかし、そのなかに、夫とのツーショット写真は1枚もなかった。孫の誕生日で撮った三世代家族写真ですら夫とは別々にして、2枚撮っていた。

徐さんとだんだん慣れてきたとき、わたしは敢えて聞いてみた。もう結婚して40年も経っているのに、夫と同じ写真画面に入りたくないのはなぜ？

彼女の答えはわたしにはちょっと意外だった。「あの上司の奥さんの一言のせいよ。結婚式で彼女にひどいことを言われたので、それ以来わたしは夫との写真撮影を生涯拒否してきた。」

ひどいことというのは、いったい何を言われたのだろう。一生ずっと気にし続ける一言、それが原因で40年も夫婦のツーショットが1枚もなかった一言、いったい何だっただろう。

後ほど徐理芳さんはこう説明してくれた。「あの面談の上司よ、結婚式に夫婦そろってやってきたけど、式が終わったところ、あの上司の奥さんが笑いながらわたしに言ったのよ。『理芳ちゃん本当に幸せだね。お二人が一緒に立っていると、まるで親子みたい。』とわたしに向かってわざと言ったのよ。」

頑固な老兵よ、あなたが生涯を通して捧げたものが、あの奥さんの言った、人のプライドを傷つける一言より遥かに大事ではないだろうか。あなたは自分の生涯と自分のやさしいところを捧げて、組織から託された幾度もの任務を遂行した。なのに、この一言をずっと気にしてきたとは、あまりにも気が小さ過ぎるのではないだろうか。

ああ、徐さんよ、わが同郷、わが先輩、あなたは菩薩だ、ちょっと気が小さい菩薩だ。

5. 王惠芝は射殺された

夜中に突然銃声が聞こえた。わたしは目が覚め、布団から飛び起きた。まだそばに寝ている王惠芝を起こそうと押した。「起きて、起きて、今銃声でしたよ」と叫びながら。彼女はまったく動かなかった。何回も何回も押したが、彼女は全然動かない。そして、わたしの手に何か生ぬるいものがついたような感覚だった。見ると血だった。彼女の血だ。わたしはベッドから降りて灯をつけた。彼女の枕が真っ赤だった。もう死んでいる。頭が打たれたのだ。

わたしは泣きながら彼女の頭についた血を拭き取ろうとした。しかしいくら拭いても無駄だった。彼女の頭は血だらけで、体がだんだん冷たくなってきた。わたしは彼女をぎゅっと抱きしめた。彼女の頭についた血がだんだん固まってきた。わたしは彼女の顔を洗ってあげた。髪を梳かしてあげた。彼女の表情は安らかだった。深い眠りに入り熟睡しているような表情だった。ただ顔には血の気がなくて、とっても白い。

きっと彼がやったのだ。あの連隊長がやったのだ。結婚を断られたから。何回も何回もしつこくプロポーズしたけど、王惠芝は断り続けた。

その後まもなく、あの連隊長は逮捕され処刑された。銃殺刑だった。死刑が執行された翌日、上から電報が届いた。死刑の執行を中止しろという内容だった。しかし間に合わなかった。

わたしは王惠芝をかわいそうだと思っていた。しかし、後になって、生き残れた自分もかわいそうだと思うようになった。愛情のない婚姻のなかで何十年も生きることは、正直つらかったのだ。死んだほうがましかも。

おわりに

中華人民共和国初期に新疆で行われた強制結婚と強制移住から生んだ数多くの悲劇を取り上げた中国軍旅文学の作家たちは、新疆統合という国家の大義名分を強調しなければならなかった。というのは、軍旅作家は現役軍人であり、もともと中国政府のプロパガンダの先兵という位置づけがあったからである。強制結婚を取り上げた彼らの作品を読んでもみると、共通点として挙

げると、まずは叙文が非常に長いということである。延々と漢の時代から近代にいたるまで、新疆を中国領土内に収めることの難しさを説明する。いわゆる新疆屯田史の「集中講義」を通して、読者に屯田の必要性和个体犠牲の不可避性を納得してもらおうという努力のプロセスである。

つまり、中華ナショナリズムという集团的利益の達成という目標のためなら、集団の構成員である個体は犠牲を惜しまず献身すべきだという価値観の読者への植え付けであり、言い換えれば一種の観念共有の構築作業である。中華ナショナリズムという観念共有の構築が成功すれば、強制結婚から生まれた様々な個人的な悲劇は「必要悪」として読者の頭に映し出され、当時の強制結婚の実施主体である中国共産党政府の無責任化（無過失・無悪意）につながるのである。すると、読者（ほとんどが中華ナショナリズム）が新疆を中国の領土内に収め続けてもらいたいというナショナリズム的な願望と、その願望の実現のために犠牲になった強制結婚被害者への同情との狭間に陥ることになるのである。

実は、強制結婚を取り上げた軍旅作家たち自身もこのジレンマに陥り、こちらの葛藤が彼らの作品の文脈から読み取れるのである。

しかし、果たして、20万人の強制移住と5万人の強制結婚がなければ、新疆がロシアに取られて、中国の領土から外されたのだろうか。つまり、彼らと彼女らの犠牲は本当に必要だったのだろうか。その答えは明らかに「ノー」であろう。戦後の新疆は国際法上中国の領土であり、ロシアが侵略してきてそれを占領する可能性は皆無に近いともいえるだろう。結局、軍旅作家たちが作り上げたロシアからの領土侵犯脅威は、強制結婚に対する読者からの非難を阻止するための虚構だったかもしれない。実際、インターネット上で強制結婚への批判が殺到だった。特に若い世代からの批判が顕著だった。個人主義という価値観が中国にもだんだん浸透しているということである。ナショナリズムが個人主義を凌駕するという構図が中国でも近年崩れ始めているのである。「中国版慰安婦」とまで非難する書き込みがネット上にあふれるぐらい、若い世代のナショナリズムに対する観念が変わりつつある。国家利益という大義名分のために、個人の利益を無条件に犠牲にするとする価値観は昔ほど強固ではない。江沢民時代から盛んになった「愛国主義

教育」の効果が、今は疑問視されている。

注

- ① 今谷明『中国の火薬庫—新疆ウイグル自治区の近代史』集英社2000年7月10日、p 11
- ② 今谷明『中国の火薬庫—新疆ウイグル自治区の近代史』集英社2000年7月10日、p 13
- ③ 山田信夫『北アジア遊牧民族史研究』東大出版会、1989年、p 26
- ④ 豊収『西上天山的女人』作家出版社、1998年、p 12
- ⑤ 公丕才『辺地母親』甘肅人民出版社、2006年6月、p 22
- ⑥ 公丕才『辺地母親』甘肅人民出版社、2006年6月、p 23
- ⑦ 盧一萍『8000湘女上天山』北京十月文芸出版社、2006年、p 45
- ⑧ 盧一萍『八千湘女上天山』北京十月文芸出版社、2006年、p 46
- ⑨ 豊収『西上天山的女人』作家出版社、1998年、p 32